

準備委員会企画シンポジウム 4

思春期における発達と問題行動

【企画趣旨】

思春期は児童期に比べて子どもの心理的不適応や問題行動が生じやすい時期であり、保護者や教員などはこの年代の子どもたちと関わることの難しさを感じることが多い。この発達段階は、古くより思春期危機や第2反抗期という言葉によって、この年代の子どもたちの持つ心理的な不安定さや困難さを伴う発達の特徴が言い表されてきた。

しかし、子どもたちの心理的不適応や問題行動は必ずしもこの年代に共通した特徴ではなく個人差が大きい。また、このような思春期的な問題の背景要因としては、個人の資質や家庭環境、友人関係などの影響が強調されてきたが、臨床実践の現場では、多くの事例において複数のリスク要因が累積しており、それらの複雑な相互作用の結果として問題行動が現れており、個別の発達の文脈を考慮する必要性を感じる人が多い。近年では思春期における多様な発達経路を想定し、発達の多様性を重視する動きが強まってはきているが、この年代の発達のあり方が十分に明らかにされ、理解が浸透しているとは言い切れないのが現状である。とりわけ、家庭や学校現場では正しく理解されていないことが多いように思われる。

そこで本シンポジウムでは、思春期における発達と問題行動の関連について、精神医学・脳科学、学校心理学、社会心理学、青年心理学といった多分野からの最新の研究知見を紹介していただき、それらを総合しながら思春期の発達の危機の問題に関する理解を一層深めることを目的としたい。